

あなたの「笑顔の花」が 咲きますように



みなさんは、職員室に向かう階段の1階にある、華道部がいけた(器に飾った)花を見たことがありますか？華道部の生徒たちは、華道の先生に教えていただきながら自由にお花をいけているので、同じ種類の花でありながら一つ一つが全く違う作品に仕上がっています。ただ、華道部の活動が無い時はお花が無くてさびしいので、私が持ってきた掛け軸(絵や字を布や紙に張り付けて、飾れるようにしたもの)や、趣味で育てている盆栽を飾っています。「花」の楽しみ方には、朝顔のように種から育てて花を咲かせる、咲いている鉢植えの花を買ってくる、華道部のように咲いている切り花を飾る、公園や道端に咲いている花や、花の絵や写真をながめるなどいろいろな方法がありますが、今の私は、自分で育てている盆栽に「お花を咲かせる」のが一番楽しいと思っています。ただ、小さな鉢に植えている盆栽に花を咲かせるのは簡単なことではありません。花が咲くまでに4年位かかったものもあるし、5年たった今も花が咲かないものもあります。今年、何年もかけて育てていたサツキがたくさんつぼみをつけたのですが、残念ながら花が咲く前につぼみがすべてだめになってしまいました。花が咲くはずの盆栽に毎日欠かさず水やりをし、虫がつかないように消毒をし、定期的に肥料をあげ、2年に1回は植え替えをし、余計な葉っぱや枝を^{せんてい}剪定し、形を整えても花が咲かないのです。



歴史上で有名な織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の性格を表しているといわれる句(鳴き声を楽しむホトギスという鳥が、もし鳴かなかつたらどうするか)に「鳴かぬなら殺してしまえホトギス(織田信長)」、「鳴かぬなら鳴かせてみせようホトギス(豊臣秀吉)」「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトギス(徳川家康)」がありますが、私は豊臣秀吉のように「(花が)咲かぬなら(いろいろ工夫をして)咲かせてみせよう」というタイプなので、あきらめることなく、花が咲くために必要だと言われていることをいろいろと試しています。工夫して苦勞した盆栽に、花が咲いた時の喜びと達成感、感動が大きいからです。

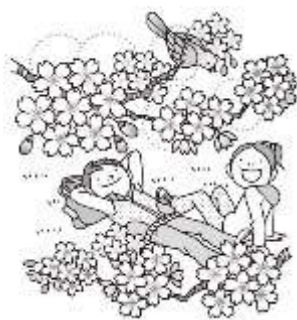


さて、こんなに一生懸命、花を咲かせるための手間や時間を使えるようになったのは、子どもたちが大きくなり、親である私の「手」を必要としなくなってきたからです。それまでは、子どもを育て、「花を咲かせる(大人にする 自立させる)」ために、口を出し、手を出し、心配ばかりしていました。それこそ「こういう花を咲かせてほしい(私が理想とするような大人になってほしい)」という想いを押しつけたこともあったし、それに反発した子どもと大げんかをしたこともありました。盆栽の花を咲かせるために必要な「虫がつかないための消毒」や「余計な枝や葉を取り除くこと」「毎日欠かさずお水をあげること」のような親の干渉は、思春期の子どもには必要のないものだったのですが、「自分が色々工夫すれば、“自分が咲かせたい花”を咲かせられるかもしれない」、「心配でたまらないから黙ってられない」という想いから、見て見ぬふりができなかつたのです。それでも、何度も何度も何度も子どもとぶつかりあい、怒ったり反省したり落ち込



んだりする中で、「親である自分が咲かせたい花」を子どもに求めるのではなく、「子どもが ありのままに咲かせる花」を一緒に楽しみたいと思えるようになりました。「子どもが ありのままに咲かせる花」・・・それは「笑顔」でした。たとえそれが親である自分から見たら「頼りない花」でも、ほかの人と比べたら「小さな花」でも、今まで見たことがないような「変わった花」でも、本人が笑顔でいられるなら、それで十分だと心から思えたのです。その想いは、パナソニックの創業者松下幸之助さんが「目の前の人をありのままに、受け入れることで幸せになれる」ことを例えた一句、「鳴かぬならそれもまたよし ホトギス」と同じでした。

わたしが子育てを通して抱いたこの想いや願いは、橘高生に対しても同じです。橘高生が辛いということの一つが人間関係やコミュニケーションの問題です。「自分では悪いと思っていないのに、相手を怒らせてしまった」「相手は思っていないかもしれないけど、自分は嫌われていると思ってしまう。」「イライラがたまるとキレてしまったり、学校に来るのが



嫌になったりしてしまう」「SNS でトラブルになってしまう」という生徒があまりにも多く、保健室で個人的に話を聞いたり相談に乗ったりしているだけでは追いつかないことを感じていました。「人間関係のトラブルを減らしたい」「コミュニケーションが苦手なことで、笑顔になれない生徒を減らしたい」「コミュニケーションのポイントをみんなに伝えたい」。そういう想いから生まれたのが、キャッチアップタイムのソーシャルスキルトレーニングの授業です。アクティブコミュニケーションでは年間20種類、ベーシックやチャレンジでは年間7種類のコミュニケーションの勉強をしていますが、最初は下を見て話をしていたり、隣の人に話しかけられなかったりした生徒が、1年間の授業が終わる頃には表情が明るくなり、笑顔が増えていく姿を見ると、本当にうれしくなります。



ソーシャルスキルトレーニングの授業は先生方をお願いしているので、直接私が生徒と関わるのは保健室の中ですが、保健室には体調不良で来る生徒もいれば、つらいことがあって教室にいけない、どうしていいかわからないと泣きながら来る生徒もいます。また最初は頭が痛い、おなか痛いと言っていたのに、実は家庭の大きな問題を抱えていてどうしたらいいかわからないという生徒もいます。悩みの大きさは人によって違うけれど、本人にとっては大きな問題で、1人で抱えきれずに保健室に来るわけですが、残念ながら1時間保健室で話を聞いただけで、解決する問題はほとんどありません。でも、少しでも気持ちが軽くなるように、少しでも解決策が見えるように、話を聞きながら一緒に考えます。泣きながら来室した生徒が、話している中で泣いていた生徒が、チャイムが鳴って保健室を出ていくときに、少しでも表情が明るくなったり笑顔になったりするのを見ると、どんな「花」を見るよりもうれしいのです。



その一方で、その生徒の笑顔のために、進路変更という道や、時には本人が望んでいない道を選ばなくてはいけないこともあります。私がかつて子どもとぶつかり合ったように、生徒自身が保護者とぶつかり合わなくてはいけないこともあります。その時は痛くても、その時は苦しくても、自分が考えて自分が選んだものであれば、自分が笑顔で過ごせるように精いっぱい頑張ってもらいたいと思うのです。実際、進路変更が決まったあと、満面の笑顔で報告をしてくれた人もいたし、保護者とぶつかりあったけど、最後は保護者と手をつないで学校を去っていった人もいました。しかし、進路変更というのはリスクもあります。卒業の時期が遅れることもあるし、転退学した先でも同じようなトラブルが待っているかもしれません。また「自由」というのは裏を返せば、自分で考えて自分で行動しなければいけない自己責任も伴うので、自分で考えない、自分で行動しない人は、いつまでも前に進めないこともあります。ちなみに、私は保健室で「学校をやめたい」という話を何十回も聞いてきましたが、「あの時、上尾橋高校を辞めなければよかった」という話を聞くことはあっても、卒業式後に「あの時、上尾橋高校を辞めておけばよかった。卒業しなければよかった」と言った生徒は一人もいません。今すでに進路変更を考えている人の中に、「橘高校がつまらないからやめる」「友だちがいないからやめる」「とにかく違うところへ行けば、楽しいことが待っているはずだからやめる」と思っている人はいませんか？あなたが次に行くところに、あなたが望むような「おもしろさ」「友だち」「楽しいこと」が、必ずあるとは限りません。むしろ、あなたが言う「つまらない」上尾橋高校で、「友だちがいない」上尾橋高校で、進級や卒業をめざすためにはどうしたらいいかを、進路変更をする前に担任の先生や保健室で考えてみませんか？この上尾橋高校で、あなたが笑顔になれる方法はないのか、もう一度考えてみませんか？辞めるのは簡単ですが、戻ることは難しいからです。



また、今、誰にも言えないような苦しい状況の中で、無理して笑顔をつくっている人はいませんか？必死に頑張っているつもりなのに、体調不良という形で動けなくなっている人はいませんか？あなたが、笑顔になれる方法を一緒に考えたいと思うので、ぜひ保健室のドアを開けてみてくださいね。

